
太陽と月の夢

ウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽と月の夢

【Nコード】

N4950T

【作者名】

ウル

【あらすじ】

千年王国と謳われる南の小国、アデン。昨夏より広がり続ける戦火に国民の不満が高まる中、若き神官騎士ジトは国王直々に任を受け、森の奥で眠る『魔女』の下へと遣わされる。唯一絶対なる異形の神。死より蘇る不死の王。そして、決して老いることのない美貌の魔女。千年の昔日より続く、呪わしく、歪んだ生と愛憎。巡り巡る太陽と月の夢が、いまここで、紐解かれようとしている。これは哀しく、愚かしく、されど美しき剣と魔法のお伽噺。異世界ファンタジー長編。転載作品。

千年と百年の眠り

繰り返される時の流れに人は狂うと、語ったのは詩人だった。騙ったのは貴方だった。それならば、もしそうならば。こんなにもずつと死ねないで、こんなにもずつと狂わないで、いてしまうことはそれだけで、きつと罪深いことでしょう。だからあるいは、既に人などではなかったのかもしれないと、気づいたときにはもう、罰すらも、何もかも、手遅れで。だからここに神はいないと、私を裁く神はいないと、言えばあなたは笑ったろうか。そうして私を赦したるうか。もしもそれならば、それこそがあなたの罪だよ。

肌にとわりつく薄闇は部屋を濡らし、いままで幾度くり返されたと知れぬ光景を霞の向こうへ遠ざける。さしわたし二十歩ほどの部屋に調度はひとつしかなく、その唯一の什器たる天蓋つきの寝台には、妙齡の女の姿があった。

「次に目覚めるのはいつだろうね」

女は碧の目を細め、寝台の横で膝を立てた男へとさし向けた。ささやく口ぶりは睦言めいて。

「ねえ、コーレリア。あんたはどう思う」

「不安か」

男、コーレリアは豊かな漆黒の髪の間から女を見つめて問うた。金章のついた鎖帷子に重ねた外套は、具足に似合う緋色地で、裾は立ち上がってなお床へと届くほど長く、背には白い紋章が染め抜かれている。褐色の肌に映えるそれらの装束は王国騎士団のものである。

「不安？ ふん、馬鹿言うなよ。あんた、俺の名前知らないわけ？」

「ワイトー・ネグライト」

「そうさ、あたいは眠りと夜と月の魔女。大陸最強の魔法使いだ。そのあたしがこれくらいのことです不安がる？面白くない冗談だわ」
自らの一人称すら気まぐれに変え、ウィトーは侮るように首を傾げる。熟れたように赤い唇から覗く歯並びは、高窓から射す残光を弾きぞつとするほど白い。

「そうだったな。お前はそう、言うんだった」

いつも、と付け加えられた言葉には応じず、ウィトーは寝台に積まれた枕からひとつを引き抜いた。深い青の地に緑の刺繍、四隅から金の房飾りを下げた大きなものだ。仰向けのまま投げ上げたそれを、魔女は指を振るだけで塵と変えた。灰さえ残らなかつた。

「マズラ神の紋章を焼くとは、王宮の神官たちが見れば卒倒したろうな」

「けつ。別に構いやしねーよ。あんな呪術師モドキがいくら集まっても、本物の魔女が呪えるはずねえんだから」

ウィトーは鼻を鳴らし、寝台に仰臥きょうがしたまま両手を広げた。またつた紗しすめから突き出た骨色の腕の先で、鍵盤を叩くように踊るしなやかな指。紡がれる音階に合わせて次々と枕が燃え上がる。銀と紫の紗を重ね横たわる姿は深窓の姫のようでも、吐く言葉は野卑な男のそれ。振る舞いは魔女のそれ。

「夜と月の魔女は、神罰すら恐れぬと云うか」

「そうよ。だってそうじゃない。私を罰せる神がどこにいる？私を殺せる神が、どこにいるというの？」

裁けない神も、裁かれない罪人も、そんなもの、ただただ虚しいだけだわ。白く燃える火の内に横たわり 魔女は火刑をもって遇せよとは、果たしていずれの者が語った文句か 彼女は静かに、そして艶然と笑って永遠を口ずさむ。

やがて、炎とまぐあうのにも飽いたらしいウィトーが気だるげに手を払うと、天蓋までをも舐め尽くさんと伸び上がった無数の舌は、たちどころにかき消えた。

「でも、そう言う貴方こそ、自分の国のカミサマを侮辱されたとい

うのに、随分落ち着いたものじゃなくて？」

ねえ王様？ 先ほどの火勢にも身じろぎせずにいた男へ、ウイトーはからかうように語りかけた。王 男、アルト・コーレリア・バルテコアは、この国のたった一人の王である。挑発的なウイトーの口ぶりも意に介さぬように、彼は禁欲的な表情を突き通す。

「為政者は信仰など持ちはしない。だが、私に従わぬ者もマズラであれば従ってくれる。それだけのことだ」

「ヒヤハハハ。なあにそれ。あんたの方がよっぽど罰当たりじゃない。まあたしかに、その神さまとやらだって、次に俺が起きる頃にはどうなってることか知れねえよなあ！」

魔女は再び下品な声で笑い出したが、それは広い部屋の中では、ひどく虚ろに響いた。残響ですらも間を空けずに消え、ふたたび部屋には静寂が戻る。それを厭いとって、彼女は舌打ちをした。何もかも、カビ臭い茶番劇だ。

「もうやめだ。やめだよ。てめーと話すんだったら、石ころでも話してたほうがよっぽどマシだ」

「そうか」

どこまでも淡泊な男の反応に、ウイトーはなにごとかを喚きながら頭をかきむしる。整った長い黒髪は乱れ、駄々をこねるように暴れる足が、枕を蹴り飛ばし埃を舞い上げた。ひとしきり叫び散らした後で、ウイトーは唐突に体を跳ね起こした。

「それだよそれ！ それがムカつくんだよ！」

額に突き刺さるうかという勢いで、彼女は褐色の肌に指を突きつける。

「なーにが『そうか……』だよ！ テキトーな相槌ばっか打ちやがって。死ね！」

突きつけられた白い指の下で、それでも眉ひとつ動かさぬ男をしばし睨めつけると、ウイトーは舌を鳴らした。ありったけの罵詈雑言を浴びせかけてから、ふたたび枕の山へと倒れ込む。そのまま寝返りをうって、彼女はコーレリアに背を向けた。褐色の肌の王は、

そんな魔女の後ろ姿を、彫像の頑なさで見つめ続ける。

「もう、眠るか」

ふてくされ動かないウイトーの細い肩へと、コーレリアは問いかけた。かき混ぜられた髪は千々に乱れ、跳ね、寝台の上に広がっている。体より長い漆黒の髪をまき散らして横たわるそのさまは、どこか、地に落ちた鳥を連想させる。

「そうね、そうすることにする。私に笑いかけてもくれない、そんな男のいる世界に用なんてないもの」

「ずいぶんと、子どもじみた物言いだ」

「ふん。当たり前だろ。子どもだよ、子ども。この世界なんてぜんぶ、子どもの戯れなんだから」

コーレリアの言葉に吐き捨てるように答えると、魔女はどこか彼方に向かってそうするように、両腕をさし出した。母に抱擁をせがむ幼子のような仕草は、先ほどまでのふてぶてしい態度が嘘のようにいとけないが、その顔に浮かんだ表情を、コーレリアの位置から窺い知れるはずもない。凧ないだ湖面の両目。そこに映った己の姿を、ウイトーが知ることのないように。

「コーレリア」

「どうした」

「君は僕を愛している？」

しばしの間があった。決まっているだろう。彼は低くつぶやくと、それを合図にしたように立ち上がった。外套の裾がさらりと床を撫ぜた。

「そうね。そう。決まっていた」

忘れていたわ、と言ったウイトーは、もしかしたら泣いていたのかもしれない。微笑っていたのかもしれない。けれど、常しえの君と呼ばれる男はそれを知り得ないし、知ることを望まない。いつのときであろうとも。

「それじゃあ、また会いましょう」

「ああ」

短く答えた男は、しばしその場に立ち尽くしてから、身を翻し、軍靴の音も静かに部屋を横切っていった。身に着けた鎖帷子がかすかに鳴り、外套がゆったりと波を打った。

「それでも」

彼の手が扉にかかったときだった。

「また、愛してくれるのでしょうか？ 僕のことを」

「いままで、何度くり返したと思っている」

ふり返らなくとも、コーレリアにはワイトーの顔に浮かんだ表情を想像することができていた。笑っているはずだ。それは鮮やかな

途方もなく凄絶な笑みのはずだ。

私たちが愛した、お前の。

「ジータニア。必ずお前を愛そう。次の私が」

「ああ。それで、安心したよ」

答えると、今度こそ本当に魔女は眠りに落ちたようだった。

やがて、音もなく扉が閉められて、部屋には贅沢な寝台と、その上で横たわる美しい魔女だけが残された。満ちてゆく闇と降り積もる時の中、自らの身をかき抱いて眠る姿は、寒さに震えるようにも、世界的一切を拒絶するようにも見えた。

王国に、国王崩御の知らせが走ったのは、それから間もなくのこと。

桜の死ぬ季節だった。

革命の夜

何かを始めなければ終わってしまうと思っていたのだとしたら、それは間違っていた。あの時、何も終わろうとなどしていなかったし、ましてや僕たちに何かを始められていたはずなどがなかったのだ。すべてはただ始まったに過ぎず、ただ流れてゆくに過ぎないのだから、そこに立てようとした旗がはためかずに燃え尽きたのは、必然と呼ぶべき結果であったのだ。もしもその必然に理由があるのだとしたら、それはひとえに僕らの愚かしさに他ならない。何かを始めるのはいつも愚者ではあるけれど、愚者はその愚かしさゆえに愚者であり続けられない。だから僕らは何ひとつ、始められなかったのだ。

アデンの平和と安寧を盲目に信じていられたのは、かつてのジトが幼かったからばかりではないだろう。事実、この国は平和であったのだから。

大陸南部の小王国、アデン。大河に接した肥沃な国土と豊富な産資源をもつその国を他国が求めない道理はなかったが、建国以来、アデンが異国の侵略を許したこともまた、一度たりとてないことだった。ここが千年王国と称されるそのゆえんを、多くの国民は知らない。穏やかな眠りのため、どれほどの血が流されるかを。彼らは戦場から遠ざけられ、そればかりか、自国の歴史すらろくに知らぬままに育つ。羊の仕事は草を喰むことであり、剣をとり書を紐解くことではないゆえに。

「どうしたジト。いよいよになって足がすくんだか？」

「いや。すこし、考えことをな」

顔を覗き込んできた同僚にジトは首を振った。彼の金髪青眼とい

う容貌は、母から北部の血を継いでいるためである。一方で、浅黒い肌と鼻梁が高く彫りが深い目鼻立ちは父親譲りのもので、筋肉質な長身と相まって、見た者に精悍な印象を与える。

「天下のフランジール家のご子息となれば、初めての任務でも余裕でそこかな？」

ニヤリと笑う相方に、「ギオン。家の話はやめると言つたら」ジトは呆れの目を返した。フランジール家といえば、優れた騎士を数多く輩してきたことで名高いが、それとジトの実力とはなんの関わりもない。まして戦いにおいてどう役立とうというのだ。そうしたことを彼が告げると、ギオンは「違いない」と笑い、丘へと向き直った。

神殿の大扉を背にした二人の見つめる先には、夜の丘にゆらめく無数の火明かり。松明と思われるそれら一つひとつを捧げるのが人間で、その一人ひとりが自分たちに少なからぬ害意を抱いているということ、ジトはここに至ってもいまだ、にわかには信じられぬ思いでいた。あの強大な帝国にすら圧倒的な威勢を誇るアデンが、まさか自国の民に反旗を翻されようとは。

「『国』と『民』とは似て非なるなり、か」

ジトはギオンの独白に応じることができなかった。無駄話をたしなめてから、丘に並んだ明かりと、課せられた任務へと意識を集中させる。

二人の騎士が纏まとっているのは、夜闇に映える緋色の外套。背中にマズラ神の紋章を白く染め抜かれたそれは、彼らが王国騎士団でも生え抜きの、神官騎士であることを示している。神官騎士とは文字通り、国王及び神官の護衛、神殿の警邏けいろうを担う騎士であり、その神官騎士として二人に与えられた最初の任務こそ、『革命軍』からの神殿防衛であったのだ。

『革命軍』。現王政の打倒を掲げ『革命』を謳う組織の存在を知りながらも、王国騎士団はいままで、彼らの活動をさして危険視してこなかった。それを慢心と呼ぶには、二つの組織の戦力差は圧倒的

に過ぎたのである。

しかし昨年の夏、情勢は大きく転換する。『革命軍』が北の帝国から、秘密裏の支援を受けていたことが発覚したのだ。当然国王コーレリアは不可侵条約違反として帝国を糾弾した。だが、先頃皇位を継いだ皇帝ドルンバツハは事実を真つ向から否定し、自国に対する云われなき誇りを理由に王国に刃を向けた。百年に渡って続いたアデンの平穩は、こうして破られたのだった。

はたしてその後王国騎士団は各地で戦果を上げたが、国内の不満は高まった。もとより遠方の帝国が相手の防衛戦。戦争の進展いかに関わらず、アデンに得るものはない。それは長い補給線の維持と、大陸最強を誇る王国騎士団への対応を求められる侵攻側にもいえたことで、だからこそ先帝時代の帝国はアデンと不可侵条約を結んでいたのだ。しかし、息子のドルンバツハの考えは父帝とは異なっていたものらしい。彼は自国軍による侵攻に加え、アデン国内の不満の高まりに乗じた『革命軍』により、王国の内部崩壊を企図したのであった。

遠く離れた国の知者の手の平で踊らされているとも知らず、『革命軍』の松明はジトたちの待つ神殿へと近づいてくる。そろそろ一人ひとりの顔も見えてきそうだ。

「神の庭で剣を抜くとは、なんとも恐れ多いことよな」

「仕方がないさ。父は、信仰のための戦いを恐れるなど仰っている」「わかっちゃういるけどな。どうも気が重くていかん」

隣で長剣を払うギオンに倣い、ジトも剣の柄に手をかけた。腰から下がる片手剣は神官騎士には不似合いな無骨なものだが、飴色に変わった柄と鞘からは、彼がその剣と過ごしてきた鍛錬の日々を容易に想像することができた。

「やれやれ……だな」

口振りとは裏腹に研ぎ澄まされる眼差し。刃のごとき横顔に、同僚の揺るぎない意志を見てとって、ジトは自身を省みる。いま自分はどんな目をしているのだろうか

「いくぞ」

「ああ」逡巡を振り払い、彼は石段へと踏み出した。「いこう」

我に仇なす罪、血を以て濯そそがれん。肉を以て贖つくわれん。

篝火に照る石段を駆け下りる。耳元で逆巻く風に、ジトは古い聖句を聞いた。

アデンの王都、アテム。マズラ神を祀まつる神殿前の石畳の広場では、先ほどから肉の断たれる音と、末期の悲鳴ばかりが切れ切れに響いている。地に転がるは斬り伏せられた死体、広がるは闇に鮮やかな飛沫あしぶ。蛍のように乱れ狂う松明の灯と、空に坐ます銀月とが、手を組み合つて照らし出す、そこはまことに地獄であつた。

刹那。その地獄の一角を緋色の影が駆けた。刃が閃き、外套が翻る。

「あがつ」

取り落とされた松明が、濡れた石を焦がして消える。崩れ落ちる男の背から剣を引き抜くと、手に残った感触にジトは知らず眉をひそめた。これで何人斬つたろうか。ギヨンと合わせれば、おそらく二十は下らないだろう。その背後で土囊とこのうの落ちるような音のしたときには、詮無き思考は終わつていた。

石段を登り、待つていたギヨンの隣に並ぶと、ジトは広場を振り返る。『革命軍』の男たちは広場の中央で曖昧ながら輪を作り、互いに背を預け合っている。顔にはみな、絶望と恐怖があつた。半数は帝国の雇つた傭兵、残りは戦争への不満に立ち上がったいわゆる義勇兵たち。百人の『革命軍』が犯した過ちは一つ、アデンの神官騎士に剣を向けた、ただそれだけであつた。

「聞け！」

ジトの朗とした声が月夜を打つ。狂騒が一転、静まり返つた広場で、男たちの視線は一点へと集まつた。神殿に続く石段の上、緋色の外套に身を包んだ騎士たち。篝火に照らし出されたその影は、わずかに二つ。百人の『革命軍』は、たった二人によつて蹂躪さ

れたのだ。いまになってようやく、彼らは自分たちがいかなるものに挑まんとしていたのか、その愚かさを悟ったようだった。

ジトが言葉を続ける。

「汝らが踏み入ったのは、マズラ神の御座、神の庭である。聖域への侵犯はすなわち、我らが父への冒瀆ぼうとくであり、彼が治めし国とその息子たる王への反逆に他ならない」

沈黙が辺りを支配する。松明に照らされた男たちの面は蒼白で、まるで絞首を控えた罪人か 事実彼らの心中も同様であったに違いない 石の胸像であった。闇を貫くジトの声は、どうやら彼の意図通りに男たちへ届いたものらしい。相手に無為な血を流させぬためには、先んじて力の差を見せつけて抵抗心を挫き、それから降伏を促すのが定石である。ジトはなおも続ける。

「しかし、父なるマズラの慈悲は深い。神の愛はいつであろうと、万民へ等しく注がれる。汝らの胸に信仰の火が戻れば、神はその罪を赦すだろう。さあ、今すぐに武器を棄て、悔い改めよ！」

男たちは気忙しく視線を見交わせる。彼らがここに着いてよりまだわずか。その間に、百近くの『革命軍』はその二割を失った。半数が傭兵であるということは、逆に言えば残り半数は正規の訓練を積んだ兵士ではないということでもある。傭兵と義勇兵の混在した彼らにまともな統率があるはずはなく、先ほどの戦闘で逃げ出した者も決して少なくはなかった。事実上、残っているのは七十がよいところだろう。加えれば、ここにいる彼らとて、あまりの恐怖に逃げ出せぬだけの者がいくらいるかもわからない。降伏すべきなのではないか。ざわめきささやく声の中に、そんなものが混じり始めるのも、無理なからぬことであった。

また、彼らを降伏へと駆り立てるのは、なにも死への恐怖だけではない。『革命軍』の半数を占める義勇兵たちは、本来宗教国家であるアデンの国民。神の尖兵たる神官騎士を前に、彼らの身の内に畏れが湧き上がることは、まったく自然のことだ。いずれにせよ、大局が降伏へ傾いていることには変わりがなかった。

「俺たちは無駄な戦いを望まない。そしてお前たちも、地の底の炎は恐ろしかろう。抵抗は互いの不利益にしかないんじゃないか？」

ギヨンが口を開いた。仮に極刑が下ったとして、死をもって苦しみが終わるといふならば、まだいいだろう。けれど流神とくしんの罪は天界の門を鎖かぎし、死後に及んでもなお飽かず、彼らの身を苛み続けることになる。言外に語るギヨンの口ぶりは、幼子を諭すようでもあり、また蔑むようでもあった。

「ギヨン」

そんなギヨンへ、ジトは咎めの視線を送る。彼とて、ギヨンの言葉や振る舞いが本心からのものではないことなど初めから承知している。けれど、下手に感情を逆撫でし、彼らの怒りを買っては、抵抗心にふたたび火をつけることにもなりかねないのだ。だが、ギヨンは小さくかぶりを振っただけで、さらに続けた。

「おののくな。命を惜しむのは臆病ではないし、逃げることは恥ではない。降伏は敗北ではない。御前に頭を垂れることが、祈りに他ならないようにな。さあ、剣を置き、神の膝下ひざかたに跪ひざまづけ」

ギヨンの言葉に、男たちはついに心を動かされたようだった。中には剣を投げ出したり、収め始める者もいる。ジトは自分の不安が杞憂に終わったことに安堵の息をつき、

「黙れ狗どもっ！」

闇を切り裂く罵声を聞いた。

ざわつく男たちの輪から進み出たのは、一人の少年。浅黒い肌と黒い髪。典型的なアデン人の容姿で、歳は十五になっただくらいだろうが、まだ幼さを残す顔立ちと痩せた体躯に不釣り合いな剣を構え、石段の上を睨みつける。

「少年。少し言葉が過ぎるぞ」

ギヨンが無関心に言った。少年に一瞥いちへつさえやらず、その右手は剣の柄をとん、とん、と規則的に叩いている。ジトの視線すらもつい

には無視して、口ぶりは冷たく、言葉は鋭い。

「まったく、お前たちも、こんな子どもにまで反逆の片棒を担がせておいて、革命軍が聞いて呆れるな」

「違うっ！」

しかし少年はなおも叫び、ギヨンの言葉を遮った。震えるその声は身の内の怒りをまったく御しきれておらず、少年の幼さを余計に際立てる結果となっていた。

「俺は望んでここにいるんだ。俺がみんなに頼んで軍に入れてもらった。あの腐った神官どもをぶつ殺すために！」

ギヨンは広場に積み重なる死体に目をやり、自分の外套を見てから、ようやく少年に目を向ける。

「そうか。それで、その軍とやらは何ができた？　せいぜいが俺の裾を汚すので精一杯だったようだが」

感情のない焦げ茶色の目はぞつとするほど落ち着いていて、『革命軍』の男たちはみな、一様に震え上がった。それはまったく、人が人を見るとき目の目ではない。

「ふざけるな！　みんなを馬鹿にするなっ！　それに、革命軍は俺たちだけじゃない。王宮にも仲間が行ってるんだ。そうだ！　いまごろはコーレリアの野郎を」

「そう思うか？」

少年を遮って薄く笑う。とん、とん、とん、と柄が鳴る。

「ほんとうか、少年。お前がそうでも、はたしてお前の仲間たちは、そう思っているか？」

問いかけられ、少年は逃げ場を探すように背後を顧みるが、男たちから否定の言葉は返らない。二人ですら彼らを圧倒した神官騎士が、王宮にはどれほどいるものか。できるのは、そうして己が無知を噛み締めることのみ。最早、抵抗の末に待つのは、新たな世界などではない。使い古された絞首台の、ささくれた荒縄、そして地の底に燃える炎だ。

「わかったようだな、自分が何に刃を向けたのか」

大陸に名を轟かせるアデン王国騎士団、その中で信仰と剣を極めた者のみが神官騎士となる。神の奇跡を身に纏う彼らは、人の形をした裁きだ。

「我々は神のしもべ。神の裁きの代行者だ。恐れることはないさ、父はお前たち罪人をこそ赦し給う」

「黙れっ！ 黙れ黙れ黙れっ！」

ギヨンの言葉尻をかき消す大音声で、少年が叫んだ。睨む目は燃え盛るようで、怒りに震えながら柄を握り締める指は血を失って蒼白だ。首を振り、息を何度も継ぎ直してから、彼はようやく言葉を取り戻す。今度はうめくような、低い声。

「何が神のしもべだ。お前らが神の代行者なら、どうして妹を助けてくれなかった！ 神官が、あの豚どもが妹を殺したとき、お前らは、マズラは何をしてたっというんだ。妹を あいつを見殺しにするのが、神のすることだったのかよ！」

少年の高ぶりにつられたように、周囲の男たちも剣を握り直す。ふたたび開かれそうになる戦端に、ジトは眉をひそめながら同僚へと近づく。彼らの任務はあくまで神殿の防衛であり、これ以上不要な血でマズラ神の庭を汚す道理はない。それは初めからわかっていたことのはずだ。

「そんなのが……そんなもんが神だって言うなら！」

だが、少年はさらに言葉を続けてしまう。ジトは彼の手が掲げたものを見て、まなじり 眦を裂いた。

「俺はそんな神、認めない！」

「やめろ！」

敵の制止を聞くはずもなく、少年は手に持った像を地面に叩きつけた。マズラ神を象った石の像は、石畳の上に呆気なく四散した。

同時。ジトの隣で、ギヨンが走り出していた。石段を、滑るように駆け下りる。編み上げの軍靴が段を打ち、深紅の裾が翻る。抜き放たれた剣身が篝火に光った。

「駄目だギヨン っ！」

とつさに差しかけられた刃を瞬時に弾き、一閃、鋼の長剣は、少年の体を易々と切り裂いていた。

途端にどつと血が噴き上がり、ギヨンの浅黒い肌と外套を濡らす。全身に鮮血を浴びながら、どこまでも平坦な口調で彼は言う。

「少年。我々は、神を愚弄する者を決して許さない」

その眼前で、数瞬前まで少年だった物が藁束のようにくずおれる。その顔はまだ、己の死を理解していないように見えた。

「それは、たとえ子どもであろうと。いかなる理由があろうとも、だ」

剣を払い、血糊を飛ばす。刃の脂を濡れた裾で強引に拭くと、ギヨンは目の前の男たちに、知っているか、と問いかけた。前髪と顎から血を滴らせた顔は冷たく静かな羅刹のもの。

「この外套が緋色に染められてるのはな。どうせ、返り血で赤くなるからさ」

信仰の刃はいつも、異教徒と咎人の血に飢えている。

常しえの君

星は自身の輝きを知らないが、そのことを彼らは嘆じない。空を這う鳥と、地に落ちるその影の、どちらが本物なのか私にはわからない。星影は星の光を云い、鶏は卵から孵る。死を知る者は生きてはおらず、死体は決して語らない。誰も知らぬものを、それゆえに恐れる、それが生きるということならば、死を恐れない者は屍なのだ。屍が死を恐れないのは、それが自分自身であるからだ。果たして何が本物なのか、あるいはすべてが偽物なのか。それならば偽物とはなんだ。本物とはなんだ。私の言葉を笑うといい。意味のないこと、矛盾したことと。意味のないこと、矛盾すること、それはいい。なんのことだ？

壁の松明と銀の燭台に照らされた大広間には、長い卓がコの字型に並べられている。窓からはぬるい春風が吹き込み、卓にかけられた深紅の布と蠟燭の灯を揺らす。風からはかすかに煙が薫った。

卓にかかった布にはそれぞれ、王とマズラ神、騎士団の紋章が縫い取られており、そこに座る男たちの地位を示している。そのうちコの字の縦棒にあたる上座には、国王アルト・コーレリア・バルテコアの姿があつた。黒髪の王は精悍な表情を変えずに、彼の正面、コの字の内側にひざまずく二人の若い騎士を見つめている。

「フランジール・ジト・サウデント。ならびに、ロツテンベルト・ギヨン・ネヘルハイム。貴公らの罪状はいま述べた通りだ。何か、弁解の言葉はあるか」

王の右手、騎士団側に立った男が言った。卓上に広げた十数枚の巻紙は報告書や雑多な資料らしく、様々な筆跡の細かい文字が読み取れる。

王に加え、十数人の騎士団幹部と神官。壁際に居並ぶ護衛の神官騎士。アデンの中枢たる男たちが一同に会している理由は他にもない。膝を立て、頭を垂れた二人の騎士は今、軍法会議にかけられているのだ。

「では、ひとつ、コーレリア様に意見を申し上げたく」

ややあつて、ひざまずいた騎士の一人、ギヨンが、豪華な絨毯を見つめながら応じた。

「貴様っ！ 自分の立場をわきまえよ！」

髭面の騎士が卓を叩いて立ち上がった。今にも卓を越えてギヨンに切りかかりかねないその剣幕を、コーレリアが手を上げて制した。「座れジョーゼス」

ジョーゼスと呼ばれた髭面の騎士は、ギヨンのほうを睨みながらも渋々指示に従った。しかし、彼が椅子に座りながら何やら小声で毒づくのを、黒髪の王が聞き漏らすことはなかった。

「ジョーゼス。お前の忠誠心は嬉しく思う。だが、この国の王は私だ。この国の罪人の処遇も、当然私が決める。わかっていような？」
「……申し訳ありません。我が君」

一瞬で怒りを収めたジョーゼスは、その場で最敬礼をした。流石というべきか、椅子に座り直した顔は既に冷静さを取り戻している。「ではギヨン。話してみせる」

「は。有り難き幸せ」

そう言つて一礼したギヨンはゆっくりと頭を上げ、膝立ちの姿勢から立ち上がる。素早く、それでいてごく自然に、彼の右手は腰に伸びた。銀光が奔る。

瞬間、広間は一挙に喧騒の巷ちまたと化した。給仕係が叫んで逃げ出し、巻紙が舞い上がる。灯が揺らめき、卓上のものが床に落ち、あちこちで硝子が割れる。神官たちは安全のため床に引き倒され、騎士たちは椅子を蹴つて立ち上がり吼えた。

しかし、それらあらゆる騒音を圧して響いたのは、完璧に揃った鞘鳴り 神官騎士たちの抜剣の音であった。

「なんのつもりだ？」

もし自らが手を上げて止めなければ、肉塊と変わっていただろう青年に、コーレリアは問いかける。それは心からの疑問に聞こえた。事実、神官騎士が数十と集ったこの場で剣を抜くことの愚かしさは、自身神官騎士たるギヨンが一番よく理解しているはずなのだ。容易に制圧できるからこそ、二人には帯剣が許されているのだから。加えてその剣は今、あるうことが同僚であるジトに向けられているのだ。コーレリアが不可解に思うのも無理のないことと言えた。

「陛下。僭越せんえつながらご覧の通りで御座います」

しかし、ギヨンが返したのは曖昧な返事だった。自らの頸くびへと伸びた無数の刃に動揺するでもなく、うす笑いすら浮かべている。

「見ての通りとは、なんだ」

コーレリアは再び問う。低い声は常のごとく感情を欠落させており、内心は窺い知れない。だが、彼がもし望みさえすれば、目の前の男を一瞬で千の肉片に解体することができるのも、また事実であり、それは髭面のジョーゼス卿すら例外ではない。

無礼なほどの間を経た後で、ギヨンは口を開いた。

「果たして、このような事態にも反応できぬ男に、百人もの人間を斬れるでしょうか」

「ギヨン！」

思わず叫んだジトを、刃先を突きつけることで黙らせ、ギヨンは薄笑いを続けた。

「今回は実に不快で、面倒な任務でした。すべて皇帝の手の内とも知らず神の庭を侵す愚かな民衆は、実に汚らわしく不愉快極まりないし、更には、こんな足手まといの子守までしなければならなかったのですから。まったく、剣の錆をとるのに何日かかることやら……」

ああ神よ！ と、ギヨンは芝居じみた仕草で天を仰いだ。その肌を剣先が撫で、血が一筋、喉を伝う。

命令違反の罪を、自分一人で被る気なのだ。ジトの睨むような視線にも、ギオンは知らぬ存ぜぬの態度である。

「なるほど、友を庇うというわけか」

膝をついた姿勢を保ちながらも、ジトは驚嘆の思いでコーレリアを見やった。王はギオンの意図を一瞬で看破したようだった。無感動な声音だが、その言葉からはギオンの行為に対する驚きと関心が読みとれた。

「失礼ながら陛下。私をこんな者と同列に見なされるのは止めて頂きたい。まして私がこの者を庇うなど、あり得るはずもない」

ギオンは肩をすくめた。可能であれば額に手でも当てかねない大仰さだ。

「だいいち、私は今でもなぜ自分が罪に問われているのかわからないのです。ただ、神の庭を侵した者たちに、相応の裁きを与えただけ 褒美を頂くことはあろうとも、罪に問われる謂われはない。そうではありませんか？」

大広間に集った者たちが、一斉に息を飲んだ瞬間だった。ジョーゼス卿を始めとした王国騎士たちの顔は、怒りの赤を通り越して青ざめ、神官たちはあまりの無法に目を背けるか、期待に光る目で若い騎士を注視するかのどちらかだ 間もなく、血生臭い光景が繰り広げられるのであろうと。実際、王に対しこれほどの無礼をはたらいたギオンは、平時ならば一族もろとも縛り首の憂き目に遭っておかしくはない。神の息子たるコーレリアを侮辱することは、マズラ神自身を侮辱することに他ならず、この国でそれは死と同義。ギオンに剣を向けた神官騎士たちも、いよいよ怒りを隠しきれない様子で、中には露骨に彼を睨みつける者さえいた。

「それならば、どうして死を受け入れる？」

コーレリアの静かな視線を受け、ギオンはゆったりと微笑んだ。

「私は父が私に死を求めるならば、ただその御意志に従うまで。大いなる神の御考えは、私のような卑小な身には、及びつかぬところにあるのでしょから」

それはあまりに冒瀆的な返答だった。死を恐れぬ、むしろ自ら望むかのような態度である。どうやって応じるのか、広間の全員の意識がコーレリアに集中する。

「そうか。背神者の謗りを受けてまで、友のために死ぬ、か。信仰の徒たる神官騎士には、つらい決断だろう」

「陛下」

苛立たしげに口を開きかけたギオンを、コーレリアは首を振って制す。豊かな黒髪が波打った。

「それ以上はいい。お前にそれほどの覚悟があるならば、望み通り計らって構わなからう」

王はそう言ってから、ギオンの隣に跪いたジトに視線を移した。

お前に問う。

「フランジール・ジト・サウデント。お前は、友を救うために命を投げ出せるか？」

コーレリアに見つめられ、ジトは身を固くする。常しえの君。黒曜石の両目からは、どんな意図も汲みとることはできなかった。だが、たとえ王の意図がどこにあると、ジトの答えは初めから決まっている。考えるまでもない。

「私は」

「陛下！ そのような者の妄言、耳を貸す価値はありません！」

割り入ったのはギオンだった。突きつけられた剣先もお構いなしに身を乗り出す姿に、さしもの神官騎士たちもわずかにたじろいだようだった。焦燥し、鬼気迫ったその表情に、先ほどまでの薄笑いの影はなく、それがかえってジトを冷静にさせた。

「私は奪うべきではない命を奪い、流させる必要のない血を流しました。それは死に値する罪です。もとより捨てるべきこの命　ギオンを救えるのならば、惜しくはありません」

きっぱりと、言いきった。

「嘘を言うな！ 俺が全部やったんだ！ 戯言はやめろ！」

叫ぶギオン。注意が散漫になった彼をすかさず神官騎士たちが取

り押さえた。床に組み伏せ、剣を奪う。間近で起こった騒乱に意識を向けることもなく「ならば」王は朗とした声で言う。

「フランジール・ジト・サウデント。お前に、使者の任を与える。そして、それを遂げたならば、お前も、そしてお前の友も、一切の罪には問わない」

コーレリアの言葉に、広間はふたたびどよめいた。

国王直々に使者を送るならば、行き先は当然他国。それもこの戦時下となれば、相手は自ずと絞られ、内容も容易に推測される。帝国への宣戦か、近隣諸国への同盟要請。いずれにせよ、今まで国土防衛に専念していたものを、本格的な侵攻戦へ変えるということ。王国騎士団幹部ですら寝耳に水の決定、それ自体への驚きに加え、そのための密使を罪人に任せるということ、さらには軍法会議の決定を覆す異例の報酬とくれば、居並ぶ騎士たちを唾然とさせるのは余りあるう。

「陛下！ 私は承服しかねます」

一人の男が進み出た。王と並んでも劣らない気迫を持った壮年の偉丈夫。王国騎士団総帥アイリヨン卿である。しかし彼の諫言はかんげん続くコーレリアの言葉によって遮られた。

「お前には『魔女』を起こしてきてもらう」

三度目の動揺が、大広間を駆け抜けた。

『魔法とはすなわち悪魔の理法　神の創りし理法をねじ曲げんとする、赦されざる力である』

教典にも記されるその理念に基づき、ここアデンにおいては、大陸唯一といえる、徹底にして厳格な魔法廃絶主義が掲げられている。だが、あらゆる原則には必ず例外があるように、アデンの魔法廃絶主義もまた、特例の存在を免れ得なかった。それも、おおよそ考え得る最悪の形で。

それこそが魔女、国土の南、暗い森の奥に眠る不老の悪魔、ウィトー・ネグライト。大陸の隅々にまで名を轟かせる、現存最強の魔

法使いであった。

そう。この国には魔女がいる。神の御名の下、あらゆる魔の放逐を理想と掲げたはずの国が、単騎にて街一つを滅ぼすほどの、当代最強の魔女を擁している。その事実は、アデンの最も恥ずべき汚点であり、矛盾に他ならないのであった。

「『魔女』を、目覚めさせるといいますか」

ざわめきが終息し、ようやくそう尋ねたアイリヨン卿の顔には、わずかとはいえありありとした嫌悪が滲んでいた。この国で、『魔女』は単なる魔法使いの別称ではなかった。それは、蔑称であるのだ。

無言を肯定とした王に、臣下は困惑のまま再度問いかける。

「しかしなにゆえ、あの者を起こさねばならぬのでしょうか。民の疲弊は無視できぬとはいえ、戦況は我が軍が優勢。なにもあのような者まで駆り出す必要はないのでは」

魔女は強大だが、無敵ではない。もちろん、一人である以上、いくつもある戦場のすべてに赴くこともできない。そしてまた、彼女が参戦するとなれば、兵の志気も大きく削がれるに違いないだろう。穢らわしい悪魔と轡くわを並べることをよしとする騎士など、いるはずがないのだから。よって、王国騎士団のみで現在の戦況を保てるのであれば、それが最も理想的であり、今のところの戦況はまさしく理想通りなのである。だからこそ、広間の者たちは先ほどの使者を宣戦の便りであると考えたのだ。アイリヨン卿の言い分はもっともといえた。

だが、コーレリアは首を横に振る。

「これは、父の望みだ。我らが父はこれ以上、無為の血を望んではおられない」

コーレリアのその答えに、騎士団総帥はにわかに顔色を変えた。凜々しい面立ちに表れた緊張の色は、他国兵から悪夢に見るほど恐れられる男のものとは思えない。彼の畏怖は一瞬にして広間全体に波及し、静寂を呼び醒ました。先ほどまで臨戦の緊張に震えていた

そこは既に、厳かな、託宣の場へと変わっていた。

「ドルンバツハは、邪悪な力と手を組んだ。それは旧く、穢らわしく、それゆえに恐るべき力だ」

今までの騒乱が嘘のように、広間は静まり返っていた。まるで弓の弦を張ったかのような緊張の中、組み伏せられたギヨンでさえも動きを止め、コーレリアの一言一句に耳を傾けている。それほどまで、アデン国民にとってコーレリアの語る言葉　マズラの言葉は重い。

「むろん、御身の放つ至高の光と、その先駆けたるお前たち騎士の剣をもつてすれば、その邪悪を祓うことは難くない。だが、羊たちが、羊飼いたちが、これ以上血を流すことを、父は望んでおられない」

ゆえに、とコーレリアは続ける。

「『魔女』の力を使うべきときであると、父は仰せられた。邪悪は、それを凌ぐ邪悪を以て制し、焼き滅ぼすべきであると」

王はそこで一旦言葉を切った。自らの言葉が浸透するのを待つように、ゆったりと周囲に視線をめぐらす。その視線を受けた者たちは各々に、コーレリアの口から語られた言葉の意味するところを想っていた。

アデン国民が『魔女』に対して抱く忌避感、マズラへの信仰心と表裏一体であり、同じだけ強いものである。誇り高い騎士たちは認めようとはしないだろうが、そこには少なからず恐怖心も混じっているだろう。ゆえに、たとえマズラ直々の大任であったとしても、魔女の下への使者の任を喜んで引き受ける者はいない。その意味で、罪人たるジトが罪の赦しと引き換えに任務を与えられたことは、前例のないことといえど、それなりの理屈が通ったことなのだ。

「フランジール・ジト・サウデント。朝日が昇るまでに、『魔女』の元へ行き、私の前に連れてくるのだ」

ふたたびコーレリアが言った。

「身に余る大任と御寛恕、有り難く頂戴いたします」

アデンにおいて、父、とはマズラのことを指す尊称だ。みだりに口にできぬ真の名前に代わるその呼称すらも、本来は『大いなる父』という意味で、それはかの神が、深い愛と父性的神格を持つこととつながりがある。だが、コーレリアがマズラを『父』と呼ぶとき、それは単なる尊称以上の意味を持つ。

「よく言った。お前を祝福しよう。神と、その息子の名の下に」

ジトは圧倒されながら頭を垂れる。彼の前に立つのは、千年の長きに渡りこの国を治める王。常しえの君。永遠を生きる唯一王。

アルト・コーレリア・バルテコアは文字通り、神の子である。

使者の背に月光は落ちて

覚悟とは、受け入れることではないと、誰かが言っていた。それは揺るがない何かを自らに作ることであると。もしかしたら今まで俺たちが求めていたのは、覚悟の仕方ではなくて、覚悟を問われたときの答え方だったかもしれない。剣を振りかざすとき、本当にその意味は確かだっただろうか、その剣が誰かを殺すことを、俺は理解していただろうかと、そう問わないために。月の光がどんなに鋭くとも、誰かが傷つくことはないが、剣はどんなに鈍くとも、必ず誰かを傷つける。それはその刃がそう作られたからだ。剣を振るう腕にどんな信念があるうと、振り下ろされた剣の意味は一つだ。そう、意味のないものなど、まさしく神にしか作れやしないのだ。あの、月のごとく。

闇より深い色がないと言えるのは、月夜の晩にこの森を駆けたことのない者だけだろう。軍で一番の駿馬の上で、ジトは梢の向こうから零れる蜜色の光を見た。そしてそれがもたらす、深い影をも。

膝をついた大理石の冷たさも気にならなかった。それほどにジトの課せられた命は重く、跪く場所は神聖だった。

いま彼の眼前には、大陸全土を見渡すようにそびえ立つ純白の石像がある。床や壁と一続きになった大理石の像は、長い首と強靱な四肢、丸太のように太くしなやかな尾を持ち、背には一対の巨大な翼を広げている。雲と火の神。全き愛を持つ大いなる父。マズラ

アデン国教における唯一神、羽を持つ蛇の姿だ。

ここは、国中の信仰を一身に浴するマズラ神の主神殿、その最奥たる祭壇の間。王を除けば限られた数人の神官しか入れぬ聖域であ

る。使者を立てる手続きを待つ間とはいえ、一介の神官騎士に対してあてがうにはあまりに不釣り合いな場所であったが、国王すなわちマズラ直々の勅命とあつては、他の者たちも口出しすることができなかつたのだろう。

と、ジトは不意に立ち上がり、剣を抜き放つた。懇願するように見つめる先には大理石の神。滑らかな軀は光を孕んで白く、繊細な彫刻を施された瞳は、光の加減や角度によって命を帯びた。

剣は誰のために振るわれるべきか。

白い光を切先に灯し、銀色の刃は空を切り裂く。一度、二度、三度

そんなことを問うなど、今まであつたらうか。ジトは自問し、即座にそれを否定した。揺るぎない信仰は、騎士たちの血を、肉を、骨を、心を、神へと奉じさせる。けれど、どれほどの信仰も、その手が振るう剣の意味を保証することはないのだ。たとえその身が神の裁きの代行であつても、その剣は正しく剣であり続ける。人を殺める道具であり続けるのだ。ひたすらに剣を振るうジトの鼻腔に、闇を乱れ飛ぶ火の粉と、血の臭いが蘇る。

『何が神のしもべだ。前らが神の代行者なら、どうして妹を助けてくれなかつた！ 神官が、あの豚どもが妹を殺したとき、お前らはマズラは何をしてたつていうんだ。妹を あいつを見殺しにするのが、神のすることだつていうのかよ！』

金の髪が乱れ、白い床に汗が玉となつて散る。脳裏に浮かぶのは、神への怒りを叫ぶ少年の顔だった。

『俺はそんな神、認めない！』

ああ。名も知らない少年の怒りが それを生んだ哀しみや戸惑いが、今ならばわかるというのは思ひ上がりだらうか。ジトは低く息を吐きながら、自身の影を何度となく断つ。それは神の名の下に振るわれる、裁きの剣であるはずだった。異教を払い魔を焼いて、悪を断ち信仰を取り戻すための剣だった。

けれど、あの瞬間から、わからなくなつてしまった。何が正しい

のか、何が悪で、何が善なのか。神が是とするものが是であつたはずで、神が非とするものが非であつたはずで。だからこそあの少年のごとき卑小な人の身で、それを否定し、あまつさえ剣を向けるなど、赦されないことなのだ。たとえ神官たちの腐敗が、信仰の徒たる目にも明らかであるうと。人を斬つた剣がどんな重みを腕に伝えようとも。それこそが神に殉ずるということだ
ならばどうして。

「弱い剣だ」

「これは、御無礼を」

ジトは慌てて剣を収め、腰を折る。

「つまらん挨拶はいい」

いつの間にか部屋に入ってきていたコーレリアは、そう言つてジトの機先を制すると、おもむろに大理石の神像へと歩み寄つた。王の紋のある緋色の外套は今はいけんは脱いでいて、剣帯と長靴、銀の帷子の金細工、そして腰に吊つた佩剣のみが、彼の地位を示していた。やや息を荒げながらジトが立ち尽くす前で、コーレリアは出し抜けにその剣を構えた。柄頭はマズラ神の頭を模し、握りと鏢つばにはルビーから翡翠まで、無数の貴石が惜しげもなく使われた、華美なものがある。

それはこの国を統べる者が持ち、その一族のみが触れることを許されるという宝剣であつた。王の剣、あるいは神の剣と呼ばれる広刃の剣は、むろん今までアルト・コーレリア・バルテコア以外の手に渡つたことはない。アデンの王が彼以外だつたことはないし、永遠の命を持つ「蘇りの君」に一族がいるはずもないからだ。

生涯で一度見れるか否かの至宝を前に、ジトが息を飲む中、
があん！

鐘を打つような音が響き渡つた。コーレリアが、神像の、その長く伸びた首へと剣を叩きつけたのだ。

「見る。傷もつかない」

呆然とするジトの前で、コーレリアは振り向かずに言う。コーレ

リアの言葉通り、石の首にはわずかな欠けもなく、その色は神の偉大を示して雪よりも白い。

「お前の剣は、この像を断つことができるか」

「……いいえ、できません」いま目の前で起きた出来事に意識を奪われたまま、ジトはかろうじて答えた。

「そう。無理だ。剣で石を斬ることはできない」黒髪の王は、剣を抜いたまま振り返った。ジトの剣を指し示す。「では、お前は私を、その剣で斬れるか？」

「まさか。この国にあって、誰が陛下に剣を向けられましょうか。まして御身は神なるもの。浮き世のどのような刃も」

「くだらない世辞はやめることだ」

コーレリアの漆黒の瞳はあまりに強く、ジトを離さない。そして王はそのまま、前触れなく、ジトに向かって駆け出した。

「何をっ」

常人ならざる速さと力をもって振り抜かれた宝剣は、紙一重で抜かれたジトの剣により、危ういところで受け止められた。だが、いまだ事態を理解できないままのジトに、コーレリアは容赦ない追撃を加える。

「陛下！ これは一体 くっ」

右からの逆袈裟。鏢迫り合いますら許さない斬撃が、ジトの体を剣ごと浮き上げ、吹き飛ばす。距離にして数歩。体勢を立て直す間もなく、黒髪の王は無表情に肉迫する。

ジトとて神の奇跡を受けた身。腕力や速力、反射速度から視力まで、並みの人間が及びつく範囲はとうに逸脱している。しかしそれでも。あるいはそれだからこそ。眼前に迫る王の姿に恐怖を禁じ得ないのだ。

「弱い剣だ」

瞬時に懐へ入り、膝を曲げて足元を切り払う。跳び退いて避けたジトの喉元を、剣先がかろうじて掠めた。

「だが、お前の剣は弱くない」

ステップを踏んで素早く後退しながら、ジトは戦慄していた。コーレリアが手にしているのは、本物の、鋼の広刃剣だ。木剣や軽い金属でできた模擬剣ではない。それをいま、目の前の男は横薙ぎに振るい、間髪を入れずにジトの喉元まで切り返した。それも、本来両手で扱うべきそれを、片手で。

常人には、そして神官騎士にすら、こんなことはできるはずがない。

「お前は私を斬れないと言う。だが、それはお前が私を斬れないという意味に過ぎない。なぜなら、お前の剣は石を斬れないが、肉や骨を斬れないわけではないからだ」

アデン王国騎士団の中、信仰と剣を極めた者のみが神官騎士となる。それは単に所属する騎士団が変わり、多大な誉れ^{ほま}を得るという謂わば表面上、名目上の変化だけを意味しない。それは神の力、奇跡を身に受けること。人の垣根を乗り越えることなのだ。ゆえにジトたち神官騎士の力は、あらゆる面で常人を凌駕する。けれど、それゆえ、それゆえにジトは恐怖する。なんとなれば、人を越える力をジトに授けたのは、他ならぬ、アルト・コーレリア・バルテコアその人なのだから。

「構える。そして覚悟を決める。向けるべき相手に剣を向けなければ、お前の剣はお前自身を斬ることになる」

いくぞ、と王は言った。

自分の骨が軋んで立てるみしりという音を、ジトは今まで幾度か聞いたことがある。馬上から肘を下に落ちたとき、手甲だけで丸太を受け止めたとき、体術で関節をとられたとき、どれもジトが『ただの騎士』だった昔のことだ。しかしどうだ。崖を飛び降り、丸太を剣で両断し、片腕で敵の骨をねじ折る『神官騎士』が、その体が、鏝迫り合いの今、悲鳴を上げていた。

笑い出したくなるほど絶望的な溝が、ジトとコーレリアの間にはあった。それは人の子と、神の子との違い。不老にして不死、その

剣は恩寵の及ぶアデンの大地においては、数千の騎士に匹敵するという、およそ神の奇跡そのものたる男は、ジトの目前で笑った。

「少しはいい眼になったか」

鈍い衝撃がジトの腹を襲った。苦悶に顔が歪む。

「だが、まだだ」

蹴りによつてわずかに空いた間隙で、強引に振られる剣。かろうじて受け流すものの、それを皮切りに始まったコーレリアの流れるような剣撃は、ジトをたやすく圧倒した。嵐。鋼でできた死の暴風が、そこに顕現する。無駄のない動作から放たれる一撃一撃に、魂こゝろを削り取るような気迫と重さが込められていた。

「さあ。戦わねば死ぬぞ」

ジトも状況は理解していた。幾合も剣を交わすうち、汗は総身から噴き出し、腕は痺れて感覚を失ってきている。限度を超える負荷を強いられた体が、熱を帯びているのも感じられた。あと数合も、持ちこたえることはできないだろう。

ならば。ジトは振り下ろされた宝剣を、力づくで跳ねのけ、一息に懐へと踏み込んだ。袈裟斬り 全力を賭した致命の剣。数瞬が何十倍にも引き延ばされる。コーレリアに跳ねのけられた剣を戻す余裕はない。躲かわすしかないはずだ。しかし。

「ようやく、覚悟ができたようだ」

コーレリアは、紛うことなく正面から、ジトの剣を受け止めていた。その傍らには、大理石の床を蠟細工のように貫いて立つ宝剣。豪奢な長剣を手離した右手は、ジトの剣、その刃の根本を、軽々と掴んでいた。

「戯れはこれまでにするか」

コーレリアが手を放すと、ジトは剣の重みに引きずられるようにして膝をついた。

「はっ、はあっはあっ……はあっ……はっ、はあっ」

「無茶をさせた」

褐色の肌の王は、悠然とした動作で、床に突き立つ剣を引き抜いた。

金の髪を額に貼り付かせ、言葉さえ覚束ないジトに対し、コーレリアは息ひとつ乱さず、庭園の散策を終えたところだとも言いながら風情だった。この国の国民がマズラ神を一片たりと疑わないのは、神の息子たる彼の、奇跡としか呼べぬ姿があればこそ。人の物差しでは測れぬ、この国の王は、そういう『者』だ。ジトはわななく膝に鞭打ち立ち上がると、痺れる腕で剣を戻した。

「準備は終わった」

ジトが息を整えるのを見計らって、コーレリアが告げた。動悸と噴き出る汗ははまだ止まらぬものの、ジトはなんとか首肯する。

本当に今夜は、ジトの手には余ることばかりだった。神殿警邏の任務に始まり、軍法会議に使者の命、祭壇の間への入室許可。そして王と交えた剣。どれ一つとつても、ジトの理解や許容、想像の器を溢れさせるような出来事だ。けれど、戸惑いを抱えながら、それでもジトは強い意志を込めてコーレリアを見返し、深々と最敬礼をする。

「行って参ります」

なすべきことは一つだ　疾風よりも速く森を駆け、ギヨンの命と名誉を救う。そこには、ジトのいかような躊躇いも疑念も関わりがない。敬礼の姿勢を解き、外套を翻したジトは、「待て」しかし、入り口へあと数歩というところで制止の声をかけられた。訝しげに振り向いた先には、マズラ神の首へ触れるコーレリアの姿。雪の白と夜の黒、そして齢を重ねた大木のような深い褐色。

「なんででしょう我が君」

問うと、図ったように美しい対比を織りなす糸の、一本であるところの漆黒の双眸がジトを射た。浅黒いアデン人の中で、一種異様な褐色の肌を持ちながら　あるいはそれだからこそなのか　その目は彼がこの国の王であることを、何より強く主張した。祭典や演説で、先刻の戦いで、何度となく目にした瞳ながら、ジトは改め

てその深さと透明さに、呼吸を忘れた。

「名前は、ユテルだ」

ユテル。ゆえに、その唇から発された言葉を、ジトはただぼんやり反復することしかできなかった。ユテル。それはアデンの古い言葉で、『希望の先駆け』を意味する。聞き覚えのない名前ではあったが、何か耳の奥で反響するようなものを感じ、ジトは問う。

「その名は……」

「そうだ。お前たちを『狗』と呼んだ、あの少年の名だ」

奔流のごとく溢れかえるのは、目、表情、言葉、そして 最期。

「ユテル・エイセル。歳は十六。父は徴兵先の戦地で死に、母親も間もなく病で逝った。それからは過酷な労働をかけもって日銭を稼いだ。そうして暮らすうち、彼は自らの食事を妹に分け与えるようになった。妹を学校に通わせ、満足に喰わせるためには、彼が腹を空かせるしかなかったからだ。むろん、学のない少年が肉体労働以上の仕事を望めるはずもない。仕事が終わると市場にゆき、残飯を漁るのが彼の日課になった。だがあるとき、立ち寄った夜の市場で妹は兄の嘘を知った。彼女はすぐに学校を辞め、兄には無断で花売りの仕事をはじめた」

コーレリアが淡々と語る痛ましい少年の姿は、神の祝福と恩寵に満ちたアデンの大地において、あつてはならないものだった。

もちろんジトとて、国内外の状況に聞き及んでいなかったわけではない。垂れ流される血と鉄はアデンの土地を荒廃させ、敵軍の作戦の一環として次々と交易路が潰された。近隣諸国には、帝国に怯え、アデンとの国交を取り止めるものまで現れた。そうした状況下、国内では貧困にあえぐ者たち、少なからぬ餓死者も出ており、『革命軍』は求心力を増している。

王国騎士団の一員として、そういった事実はいやでも耳に入っていた。しかし、それらを知った上で あるいは知ったと思ひ込んだ上で ジトはそれを、羊と羊飼いが同等に受ける痛みなのだと

考えた。国民は街中で飢えて、死ぬ。同じように騎士は戦場で血を流し、死ぬ。羊が飢えるように、羊飼いまも飢えるのであると。

だが、自分がいつも屋敷や王宮を囲む塀の向こうに見える、あの街の中で、『実際に』それほどまでの地獄が広げられていると、彼は想像していなかったのだ。いや、もしかすると地獄のことならば知っていたかもしれない。知らなかったのは、業火に焼かれるの人々のほうだった。ちょうど、羊を放つ草原を見、その荒廃だけを見て、羊一頭一頭のことを見ようとしない羊飼いのごとく。

自らのあまりの愚かしさに拳を震わせるジトの前、コーレリアの言葉はなおも続いた。

「だが、彼女は仕事中、運悪く神官見習いの一団に目をつけられてしまった。難癖をつけられ、路地裏に引きずり込まれた彼女は、興に乗った男たちに玩具のように弄ばれた末、腑はらわたを割って死んだ。父を失い、母を亡くし、唯一の肉親となった妹まで殺された。そうすると、皮肉なことに飢えは消えた。彼一人の身だけなら、彼の稼ぎだけでも十分に養えたからだ」

「なぜ……」

噛み締めた歯の隙間から漏れたのはうめき声だった。ジトは、自分の共感がやはり思い上がりすぎなかったのだと、ここに至って確信した。己が無知であることすら知らなかった、そのすさまじい愚かさ、体の内で灼熱する。もし赦されるのであれば、今すぐに剣を抜き放ち、自分の喉を裂いてしまいたかった。

しかし、どうやって、死で死を贖うことはできないのだ。

「なぜ、そんなことを知っているのか。あるいは。なぜ、こんなことをお前に言うのか」

知りたいか。ジトを見つめる漆黒の目は語りかける。そう。たしかに、この夜を知らず、あの少年を知らぬ、かつての無知で幸福な幼子のままであれば、きっと彼はそう尋ねたのだらう。だが、今の彼は肯うけいかない。

「私が陛下に問いたいのは、別のことです」

整った鼻梁の上で、ほう、とコーレリアは眉を動かす。ジトにはそれが驚きではないことがわかった。何もかも見透かす王の前で、ジトは瞑目する。

誰のために剣は振るわれるべきか

その問いに答えはない。あるのはただ、剣を振るうことで、奪われる命があるという、単純にして強固な論理。厳然たる現実のみだ。赤子が泣きながらこの世に生を受けるとき、そこに貴賤のないように、剣を振るったとき、そこにどんな理由があろうと、人を殺めたという事実揺るがない。

『それは、たとえ子どもであろうと。いかなる理由があろうとも、だ』

あるときギヨンが口にしたように、逃げ口上ではないそれが真理。その真理を悟っていたからこそ、ギヨンはあるとき覚悟の下に剣を抜き、悟っていないからこそ、コーレリアはジトと剣を交えねばならなかった。人を斬る、覚悟のために。しかし、だからこそ、問わねばならない。コーレリアが言ったどちらでもない、三番目の問いを。『希望の先駆け』の名を与えられた少年の、その最後にして一番の『なぜ』を、問わねばならない。それを目の前の男も望んでいるのではないかと思えた。

ジトはふたたび目を開き、問う。

「どうして神は、ユテルを、彼の妹を、母や父を、救ってはくださらなかったのですか」

身を挺してまで自分を守るうとしたギヨンがこれを聞いたらどう思うだろうか。背神者、という言葉が浮かんだ。ジトは心の中で友に頭を下げ、それでも視線を揺るがさなかった。

今までジトが経験した中で、それは最も長く、最も永い沈黙だった。コーレリアの目にあつたのは、あるいはなかったというべきか。あらゆる感情を絶した、無であった。千年に渡りこの国に君臨し、もはやアデンという概念そのものと化した男の、絶望というにはあまりに多くを失いすぎた眼差し、ジトにはそれが、大理石の

神像によく似て見えた。

「……救わなかったわけではない。ただ、救えなかったただけだ」

再びコーレリアは言葉を紡ぐ。凧いだ湖面に指を浸すような静かな声音は、万の言葉を連ねるよりも遙かに雄弁に、彼の物語を物語る。

「私にすべてを救う力はない。だが、それでも私は王であることを止めぬし、父もまた、そうだ。それが罪なら、私は咎人でいい。暴君と呼ばれることも厭わない」

王は言った。

「王とは 神とは、そういうものだ。唯一であるというのは、そういうことだ」

ああ。ジトは一瞬にして理解する。『常しえの君』、まさか、これほどまでに揺るぎない意志が、痛ましい魂が、本当に存在し得るというのか。

「貴方は、すべて……この千年の、すべてを……」

ユテルのように。その妹のように。その父のように、母のように。この国に生まれ、死んだ、すべての命を。絶望を、苦しみを、悲しみを。憶えているというのか。

無言は、肯定だった。

「なぜ……そんな……」

千年。ジトは永劫を幻視する。それは一人の人間が生きるのにはあまりに、あまりに永すぎる時間。明けることのない夜は、果たしてどれほどのものを彼から奪い、どれほどの孤独をもたらしたのだろうか。想像することすら憚はばかられるほどの孤絶が、そこにはあった。

「贖罪というには、愚かすぎるかもしれんな」

露悪的に呟くコーレリアに、ジトはまた自分の中の何かが揺らぎだすのを感じた。光満つる白亜の聖室にあつて、貴方の姿はまるで、この世の苦しみをすべてを一身に背負おうとするようではないか。

「私はすべてを知っていた。少年の名も、その人生も、苦しみをも

知っていて、しかし、何もできなかったんだ」

わかるか、と王は言った。私がどうしてお前にあの少年の名を告げたかを。

「フランジール・ジト・サウデント。私はお前に、自らの罪を、その贖いを、引き受けさせようとしたんだ」

王の言葉に間をあげず、ジトはゆっくりとかぶりを振る。

「……いいえ」

青い両の目が、深い漆黒の淵を見返した。

「たとえ、それが罪でも」

頬に当たる風が弱まるのを感じ、ジトは回想から覚めた。馬上から見る森の様相は変わらないが、飛びすさるように流れていたはずの景色は、目に見えて速度を落としてきている。ここまで無休で走ってきて、流石に疲れが出たか。思い、うつすら汗をかいた馬の背を見やったが、特に疲れた様子もなく、休息を求める仕草もしてこない。どころか、その姿だけを見れば、先刻までと変わらぬ速さで地を蹴っているように思える。

だいいち冷静に考えれば、これは軍でも飛び抜けて屈強な、それも聞き及べばコーレリア直々に『奇跡』を施したという軍馬である。ただか数刻ばかり走らせただけで疲れを見せるはずもないのだ。

ならばどうしてか。自問したとき、ジトに思い浮かぶ答えは一つしかなかった。目的地、魔女の眠る森の中心へと近づきつつあるということだ。

ことアデンにおいては、神の定めた理を歪め嘲るものとして忌避される超常の法、魔法。その非合理的な力ならばあるいは、月光を蜜蝋に変えるように、無理矢理に馬脚を緩めさせるのも容易なのではないか。『魔女の森』の中心、魔女の居城たるそこには、魔女自身が望まぬ限り決して辿り着くことができない。そんな空想めいた伝

承にも、一抹の真実が含まれていたということだろう。

式典行進のような歩調に身を委ねながら、ジトは外套の懐を探る。ややあつて彼が取り出したのは、緋色の封蝋の見てとれる一枚の封書だった。彼はそれを自らの行く手へ掲げる。

「なっ」

途端、一陣の風が封書を舞い上げた。さながら猛禽が獲物を狩るように、風は封書を攫い、冴え冴えとした月光に晒す。ジトが呆気にとられるうちに、王の印璽の捺された蝋印は空中で融け、羊皮紙は、まるで誰かが広げてでもいるように、ぴんと宙に留められた。

いや。おそらくは実際、その通りだったのだろう。ジトがそう思ったのは、不意に封書が燃え上がり、景色が再び後方に流れ始めてからのことだった。あれはまさしく、魔女が羊皮紙へ目を通す、その姿であつたに違いない、と。なにしろ、改めて考えれば、ここは未踏の樹海である。ここに至るまで馬が走れるような道が残つていたこと自体がまずもおかしいのだ。最初からすべては掌の上、ということか。ジトはより一層身を低くすると、闇よりも深い月光の下を、脇目も振らずに走り抜けてゆくのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4950t/>

太陽と月の夢

2011年6月24日09時40分発行